

スポーツ参加のコミュニティ・モラル 形成機能に関する研究

—特に、自治省モデル・コミュニティについて—

○川西正志 国友宏渉 鈴木揚一 中島豊雄
(鹿屋体育大学) (中京大学) (愛知県立長久手高校) (名古屋大学)

スポーツ参加、コミュニティ・モラル、モデル・コミュニティ

1. 緒言

わが国において、これまで多くの地域で現代人の自由と解放性に立った参加を前提とした、新しいコミュニティとか地域社会づくりが模索され始めて10年以上を経ようとしている。

このような動きは、1969年9月の国民生活審議会調査部会の報告書「コミュニティ—生活における人間性の回復」¹⁾の刊行に端を発している。この中では、1960年代の高度経済成長のあおりを受け、崩壊の危機に直面していたわが国の地域社会の今後のあり方を鑑み、「国民生活優先の原則」を打ち立てるため、生活の場における集団形成の必要性を説いた。さらに、そこでは、かつての地域共同体にみられた拘束性や閉鎖性を否定し、新しい意味での心のよりどころとなるコミュニティの創造を提唱していた。

その後、関係省庁は各々の立場から新しいコミュニティ施策を公にし、とりわけ、ここで問題とするスポーツとコミュニティ形成の関係に着目したものは、1973年の経済企画庁の「经济社会基本計画—活力ある福祉社会のために」²⁾と、翌年、同庁から出された「コミュニティ・スポーツ施設整備計画報告書」³⁾が主なものである。前者の中では、「スポーツ活動は増大する余暇を楽しみながら、人間本来の活動力を取り戻すという現代の不可欠な要素である。」と、コミュニティ・スポーツの理念と意義についてふれ、そのためのスポーツ施設の整備の必要性を唱え、そこで行なわれるスポーツ活動が地域住民相互の接触を深め、新しいコミュニティの形成に貢献することを期待していた。そして、それを受けて後者のスポーツ施設整備のための指針が示された訳である。しかしながら、それら施策の具現化については、実際的には困難なことが多く、より実態に即したコミュニティ施策の出現を待つに至った。

自治省では、地方行政を推進するうえで、広域市町村圏及び日常近隣生活圏の設定とその整備に関する基本方向を示した。特に、日常近隣生活圏については、1973年から、「コミュニティ(近隣社会)に関する対策要綱」⁴⁾に基づいてモデル・コミュニティの設定を中心とする具体的な施策を打ち出している。この施策の主旨では、「住民は快適で安全な生活環境のもとで、健康的で文化的な生活を営むことを欲している。このような望ましい生活は、住民の日常生活の場である近隣社会の生活環境整備とあわせて住民の地域的な連帯感に基づく近隣生活が営まれ、はじめて実現されるものである(後略)。」として、特に、社会福祉や保健施設等の充実とともに、日常の文化、体育、レクリエーション等の活動を行なうのに必要な施設の整備の必要性を述べ、新しいコミュニティを創造するため、大きくは都市的地域と農村的地域の二通りに分けて、全国83地

区をモデル・コミュニティとして指定し、現在に至っている。

以上述べたように、わが国のコミュニティ施策の経緯の概略についてふれたが、ここで問題とするコミュニティについては詳しくふれていない。コミュニティの概念は、未だ、明確なもの少ないが、過去のR.M. マッキーバー⁵⁾やG.A. ヒラリー⁶⁾等の研究成果に基づき、さらに、より実態に即した意味の松原⁷⁾の指摘する次の四要件を満たすものを、ここではコミュニティとして規定しておく。すなわち、1. 領域性(territoriality)、2. 社会的相互作用(social interaction)、3. 社会的資源(social resources)、4. コミュニティ感情(community sentiment)である。また、そのうち、コミュニティが形成されたか否かについては、R.M. マッキーバー⁸⁾も指摘するようにコミュニティに住む人々の意識や態度の要件としてのコミュニティ感情を、その核として位置づけるのが妥当であろう。これまで、コミュニティ形成に関する社会学的な実証的研究では、鈴木広⁹⁾のものがあるくらいでその数は少ない。鈴木は、コミュニティ内の人々の意識や態度をモラル(感情)とノルム(規範)の大きさは二方向からとらえ、そのことによってコミュニティ形成の質と量を明らかにしている。

また、最近のスポーツやレクリエーション活動のコミュニティ形成機能に関する研究では、海老原¹⁰⁾や中島¹¹⁾ものがあるくらいで、その数は少ない。しかしながら、一方では、コミュニティ形成にスポーツやレクリエーション活動が有効な手段であるとする大方の見方や、それに基づいた実践的活用がある中で、このことについての実証的研究も行なわれなければならないであろう。

2. 目的

本研究は、自治省モデル・コミュニティに在住する人々のコミュニティ・スポーツ参加のコミュニティ・モラルへの影響を明らかにし、さらに、都市・農村地域別に比較検討することを目的としている。

具体的には、過去の研究結果を参考に次の二点についての仮説を検証することにした。

- 1) コミュニティ・スポーツへの参加は、コミュニティ・モラルへ有効な影響を及ぼす。
- 2) それは、農村地区よりも都市地区において、より顕著である。

3. 方法

1) 対象地区の概要

本研究で対象となった、自治省モデル・コミュニティの都市・農村地区(二地区)は、愛知県内に昭和48年度に指定されたところである。尚、両地区の地理的範囲は、小学校一学区に設定されている。

まず、都市地区として選定された愛知県春日井市高座地区は、名古屋市市の北部に位置する周辺都市で、近年ニュータウンの建設とあいまって急激に人口が増加した、いわゆるベッタウン化した地域に隣接するものの、比較的歴史のある地区で住民のまとまりもある地域である。

次に、農村地区として選定された愛知県田原町東部地区は、県南部の渥美半島東部に位置し、町の主要産業は農業で近代農業の先進地となっている。1966年からは、東三河臨海用地としての造成工事が進み、県内の大手企業が進出し、にわかに活気を帯びてきた。地区内の東部は、県内中堅都市豊橋市に隣接し一部新興住宅地域へと変貌しつつある。

この二つの研究対象地区は、両地区ともコミュニティ推進協議会が中心となり、地区内の行事や住民活動について、ほぼ、同様の運営形態と内容をとっている。

2) 調査方法

① サンプル

本研究で用いたサンプルは、先に選定した両モデル・コミュニティ地区(都市・農村)に在住する、20才以上の成人男・女のうち、各地区で1,000人ずつ(計2,000人)を、無作為に地区別、性別、年齢別に層化三段比率サンプリングによって抽出したものである。

② 調査方法

調査地区の資料収集や聞き取りを中心とした事前調査は昭和57年4~5月にかけて実施し、所定の質問用紙による本調査は、同年9~10月にかけて各地区のコミュニティ推進協議会役員(延150名)の協力を得て、手渡し法による調査用紙の配布・回収が実施された。

本調査及び本研究分析対象標本についての内訳は、表1である。

③ 調査内容

本研究で用いる調査項目については、表2に示すように、まず、1.対象者の属性(10項目)、2.コミュニティ・スポーツ参加(3項目)、3.コミュニティ・モラルに関する項目(11項目)で計24項目である。

表1 調査及び分析対象標本

地区	調査対象標本数		分析対象標本数(外的基準)	
	配布数	有効回収数(率)	35歳以上28才以下 行事参加	現在のスポーツ参加
都市地区 (春日井市高座地区)	N 1000	807 (80.7)	621	669
農村地区 (田原町東部地区)	N 1000	784 (79.4)	476	668
計	N 2000	1601 (80.1)	997	1327

表2 調査項目

要因群	項目
属性	1.性別 2.年齢 3.結婚 4.学歴 5.職業 6.勤務地 7.家族構成 8.居住年数 9.出身地 10.住居形態
コミュニティ・スポーツ参加	1.町民運動会への参加 2.盆踊りへの参加 3.日常のスポーツ実施
コミュニティ・モラル	1.同一化 2.安堵感 3.仲間意識 4.好き嫌い 5.役割意識 6.行事への関心 7.相互協力 8.団結心 9.リーダー 10.永住意志 11.総合

特に、本研究の分析に主要な意味をもつ、コミュニティ・スポーツ参加とコミュニティ・モラルについて述べておく。

④ コミュニティ・スポーツ参加

コミュニティ・スポーツ参加を、直接地域住民に関係のあるもの(コミュニティ・スポーツ行事参加)と個人若しくは一部の任意な人々と関係のある個別的なもの(現在のスポーツ参加)に分けている。前者では、コミュニティ・スポーツ行事として、運動会・盆踊り大会への参加、不参加を、後者では、日常的なスポーツ活動の実施の有(月3回以上実施)・無(全くない)について質問している。

⑤ コミュニティ・モラル

コミュニティ・モラルとは、鈴木によれば、感情(Affection or Attachment)、参加意欲(Willingness for commitment)、統合認知(Cognition of Integration)の三つの側面から形成されるとされている。本研究では、表3に示すように、それら三つのモラル形成要因群から8項目を選定し、かつ、地域評価に関する3項目も合わせて計11項目をコミュニティ・モラル調査項目として設定した。

尚、各質問項目への応答は、各々四段階の回答を一つずつ選ぶようにしてある。

表3 コミュニティ・モラル調査項目

要因群	項目
感	①同一化 Q. あなたは、人からこの地域の悪口をいわれたら、何か自分の悪口をいわれたような気になりますか? ②安堵感 Q. あなたは、外出してこの町に帰ってきた時に、「自分の町に帰ってきた」と感じてホッとしますか? ③仲間意識 Q. あなたは、この町の人は、みんな仲間だという気がしますか? ④好き嫌い Q. あなたは、この町(地域)が好きですか?
参加	⑤役割意識 Q. あなたは、この町のためになることをして何か役に立ちたいと思いませんか? ⑥行事への関心 Q. あなたは、あなたの自治区(町内や学区、コミュニティ地区)でするいろいろな行事(役員改選、年中行事)などに関心がありますか?
統合	⑦相互協力 Q. あなたは、この地域に住んでいる人は、みんなお互いに何かと世話を焼いていると思いませんか? ⑧団結心 Q. あなたは、この町の人たちは、互いに協力する気持ち(団結心)が強いほうだと思いますか?
評価	⑨リーダー Q. あなたは、この自治区(町内や学区、コミュニティ地区)のリーダー達(町内会、婦人会)は、概して地域のためによくやっているといませんか? ⑩永住意識 Q. あなたは、事情が許せば、ずっとこの地域に住みたいと思いませんか? ⑪総合 Q. あなたは、いろいろなことを総合して、この地域は住み心地がよいとお考えですか?

3) 分析方法

本研究では、コミュニティ・スポーツ参加のコミュニティ・モラルへの影響を明らかにするため、前述した二つのコミュニティ・スポーツ参加（行事参加とスポーツ参加）レベルを外的基準に、コミュニティ・モラルの11項目を説明変数とし、その各々の参加を規定するモラル要因間の多変量的な解釈をするため、林の数量化理論第II類を用いて行なった。

本研究の分析に用いたプログラムはSPSS (Statistical Package for Social Sciences)で、計算は名古屋大学大型計算機FACOM230-60/75を利用した。

4. 結果及び考察

スポーツ参加とコミュニティ・モラルについての分析結果の前に、分析対象標本の属性について述べることにしよう。(表4参照)

① 分析標本の属性

まず、性別については都市、農村両地区とも約半数ずつであり、年齢は、全体で30才代が最も多く、次いで20才代、40才代の順で、やや農村地区が年齢層が高くなる。

結婚は、両地区とも既婚者が85%以上を占めている。

学歴では、高卒が4割以上を占め、次いで、中卒の順であり、やや農村地区の学歴が低くなっている。職業では、両地区とも専業主婦の占める割合が2~3割と多いが、都市地区では、自営業、事務職、専門：技術的職業の順となり、地方、農村地区では、第一位に農業従事者が、次いで、技能工・生産工程職業と事務職が多い。

勤務地については、現市町村内が全体で4割を占めているものの、農村地区では49.7%とより多くになっている。家族構成は、両地区とも核家族が半数以上を占めているものの、農村地区の方がやや核大家族の占める割合が高くなっている。出身地は、両地区とも現住所、県内、現市町村内がほぼ同様の割合を占めているが、都市地区の方が県外からの転入者の割合が多くなっている。住居形態については、両地区とも持家が9割近くを占め、特に、農村地区ではその割合が高い。

以上、分析対象標本の属性についての調査結果の主な傾向についてみたが、両地区に多くの共通した結果はあるものの、転入者、移動者の多い都市地区と土着性の強い農村地区とは、自ずと、職業、学歴などにおいて、地域的特性としての差異がみられた。

表4 分析標本の属性

外約基準	地区	7. 性別		8. 年齢						9. 結婚		10. 学歴								
		男性	女性	20代	30代	40代	50代	60代	60代以上	未婚	既婚	小学校	高小旧制 中学校卒	旧制中 新制高	旧制高 短大卒	新制大 旧制大卒	新制大 旧制大卒	各種学卒	在学中	その他
		N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N
現在のスポーツ参加	都市	N=669	48.7	51.3	22.5	26.1	23.2	15.7	13.5	14.6	85.4	5.7	20.9	43.0	7.8	14.2	4.9	2.5	1.0	
	農村	N=658	47.7	52.3	22.8	26.0	16.4	17.3	17.5	10.5	89.5	7.3	30.4	45.1	4.8	7.0	4.4	0.3	1.0	
	計	N=1327	48.2	51.8	22.7	26.5	19.8	16.5	15.4	13.0	87.0	6.5	25.6	44.1	6.1	10.6	4.7	1.4	1.0	

外約基準	地区	11. 職業										12. 勤務地									
		専門 技師的	管理的	事務	監督 監督	販売 販売	農林漁 業職	採掘	鉱業	運送 運送	情報 情報	技能工 生産工程	サービス	主 主	学生	無職	その他	現市町村内	県内	県外	該当なし
		N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N
現在のスポーツ参加	都市	N=669	8.5	7.3	11.5	12.6	0.7	0.1	1.9	8.1	4.5	34.4	3.3	5.8	1.2	30.9	27.4	2.2	39.4		
	農村	N=658	7.9	3.5	9.0	7.0	26.3	0.2	3.2	10.5	2.0	22.8	0.6	6.2	1.0	49.7	18.2	0.8	31.3		
	計	N=1327	8.2	5.4	10.2	9.8	13.4	0.2	2.6	9.3	3.2	28.6	2.0	6.0	1.1	40.2	22.8	1.8	35.4		

外約基準	地区	13. 家族構成				14. 居住年数					15. 出身地						
		単 単	核 核	大 大	其 其	10年未満	20年未満	30年未満	40年未満	50年未満	50年以上	現住所	現市町村内	県内	県外	その他	
		N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	
現在のスポーツ参加	都市	N=669	2.7	59.0	29.0	9.3	35.4	23.5	18.1	10.9	7.2	4.9	24.5	20.8	28.1	15.4	11.2
	農村	N=658	3.2	44.5	37.4	14.9	32.9	20.5	13.8	15.7	7.1	9.9	29.8	29.2	25.8	4.9	10.4
	計	N=1327	2.9	51.8	33.2	12.1	34.1	22.0	16.0	13.3	7.2	7.4	27.1	24.9	27.0	10.2	10.8

外約基準	地区	16. 住居形態							
		持 持	公 公	長 長	社 社	同 同	其 其	其 其	
		N	N	N	N	N	N	N	
現在のスポーツ参加	都市	N=669	85.7	8.1	0.6	1.8	1.0	2.4	0.4
	農村	N=658	93.2	1.5	0.0	0.0	4.6	0.8	0.0
	計	N=1327	89.4	4.8	0.3	0.9	2.2	1.6	0.2

② コミュニティ・スポーツ参加とコミュニティ・モラル

次に、本研究の主目的である二つのコミュニティ・スポーツ参加レベルを外的基準に、11項目のコミュニティ・モラルを説明変数とした数量化第II類による要因分析結果について述べることにしよう。

A. コミュニティ・スポーツ行事参加

数量化の分析結果については、都市、農村両地区別に表5と6に示してある。まず、両地区における外的基準に対する、モラル項目の要因による判別力と規定力の強さを知るための相関比(η)を見てみると次のようである。

都市地区では、相関比(η)が0.463で農村地区の0.447と比較し、ややその判別力が上回っているものの、両地区とも相関比の最大値(1)に対する絶対値からいえば、全体としては強い判別力を持っているとはいえない。しかしながら、この種の研究¹²⁾¹³⁾¹⁴⁾では相関比が、この程度でも十分な判別力をもってると解釈されている場合もあり、本分析結果においても一応の判別力をもつものと考えたい。

次に、各モラル項目間の規定力の強さをレンジと偏相関係数の大きさの順に、その結果についてみてみよう。

まず、両地区とも項目間で1位の規定力をもつものは、参加意欲を示す行事への関心が、スポーツ行事参加に強い影響力を示している。第2位以下では、両地区間に差異が見られるのでその各々についてみよう。

都市地区においては、2位に感情の安堵感、次いで、参加意欲の役割意識、感情の同一化、評価の総合、統合認知の相互協力の順である。また、農村では、第2位に感情の好き嫌い、次いで、評価の総合、統合認知の団結心、評価の永住意志の順となっている。

すなわち、都市地区では、参加意欲に強い関連を示し、そして、感情的側面では、心のやすらぎを求める同一化感情や安堵感、さらには、それを裏づける地域への住み心地についての総合評価と、統合認知としての相互協力についてなど比較的対地域に対する抽象的かつ、肯定的に表現される意識や態度によって、スポーツ行事参加が規定されている。

他方、農村においては、地域の好き嫌い感情や住み心地に対する評価、統合認知の住民間の団結心の強さ、さらには、永住意志についての評価など、都市地区と比較し地域住民に対して、より明確にされた意識によってスポーツ行事参加が支えられている。

このように、コミュニティ・スポーツ行事参加がコミュニティ・モラルに影響を及ぼし、それは、都市地区の方が農村地区に比べやや強い判別力をもっている。このことは、コミュニティ・スポーツの社会的機能が農村地区よりも市街地、周辺部に強く働くという海老原¹⁵⁾の研究結果とよく似た傾向を示している。さらに、影響を及ぼすコミュニティ・モラルでは、両地区とも直接的に行事参加に関係する参加意欲としての行事への関心が最も強い規定力をもっている。都市地区では、具体的な住民間のまとまりや相互評価よりも、居住地全体への抽象的に表現された意識や態度に、農村地区では、土着性と住民間の相互協力が地域生活に不可欠な要素となっているため、より明確にされた地域に対する意識や態度に強い関連を示している。

表5 数量化の結果 (都市)

(n=463)		外的基準: コミュニティ・スポーツ行事参加					(n=257)		外的基準: 現在のスポーツ参加					
	説明変数	偏相関	順位	レンジ	順位			説明変数	偏相関	順位	レンジ	順位		
感情	① 同一化	.129	4	.915	4			① 同一化	.057	7	.897	8		
	② 安堵感	-.090	7	-.917	2			② 安堵感	-.063	6	1.900	7		
	③ 仲間意識	-.100	6	-.718	8			③ 仲間意識	-.078	4	.886	9		
	④ 好き嫌い	-.059	10	-.775	7			④ 好き嫌い	-.041	10	1.159	4		
参加	⑤ 役割意識	-.133	3	-.899	3			⑤ 役割意識	-.120	2	1.632	3		
	⑥ 行事への関心	-.289	1	2.281	1			⑥ 行事への関心	-.014	11	-.262	11		
統合	⑦ 相互協力	-.142	2	-.795	6			⑦ 相互協力	-.092	3	.986	6		
	⑧ 団結心	-.069	8	-.446	10			⑧ 団結心	-.054	8	1.062	5		
評価	⑨ リーダー	-.036	11	-.396	11			⑨ リーダー	-.130	1	1.798	2		
	⑩ 永住意志	-.063	9	-.494	9			⑩ 永住意志	-.063	5	1.806	1		
	⑪ 総合	-.104	5	-.801	5			⑪ 総合	-.048	9	-.853	10		

表6 数量化の結果 (農村)

(n=447)		外的基準: コミュニティ・スポーツ行事参加					(n=299)		外的基準: 現在のスポーツ参加					
	説明変数	偏相関	順位	レンジ	順位			説明変数	偏相関	順位	レンジ	順位		
感情	① 同一化	-.105	5	-.839	8			① 同一化	-.019	11	.253	11		
	② 安堵感	-.071	6	-.796	6			② 安堵感	-.133	2	1.404	5		
	③ 仲間意識	-.024	10	-.294	10			③ 仲間意識	-.095	6	1.232	7		
	④ 好き嫌い	-.133	2	1.317	2			④ 好き嫌い	-.100	4	2.547	1		
参加	⑤ 役割意識	-.010	11	-.091	11			⑤ 役割意識	-.164	1	1.542	4		
	⑥ 行事への関心	-.334	1	2.878	1			⑥ 行事への関心	-.062	7	.877	10		
統合	⑦ 相互協力	-.110	3	-.790	7			⑦ 相互協力	-.107	3	1.959	9		
	⑧ 団結心	-.059	7	-.867	4			⑧ 団結心	-.098	5	1.690	2		
評価	⑨ リーダー	-.043	9	-.583	9			⑨ リーダー	-.078	9	1.637	3		
	⑩ 永住意志	-.106	4	-.824	5			⑩ 永住意志	-.080	8	1.171	8		
	⑪ 総合	-.050	8	-.977	3			⑪ 総合	-.068	10	1.357	6		

B. 現在のスポーツ参加とコミュニティ・モラル

日常的に、個人の自発的な意志によって実施されるスポーツ活動への参加と、コミュニティ・モラルについての分析結果についてみてみたい。

まず、外的基準に対する説明変数の判別力をみてみると、都市・農村両地区とも相関比(η)が0.257と0.299とあまり高くない。各項目間の規定力を見る限りでは、ここでの大きさはともかく、偏相関係数もあまり大きい値を示さなかった。しかしながら、レンジの大きさの順に両地区間の各項目に差異がみられるため、一応の分析結果についてふれておくことにしよう。

まず、都市地区では、レンジの第1位が評価の永住意志、次いで、リーダーへの評価、参加意欲の役割意識、好き嫌いの感情、統合認知の団結心と相互協力の順となっている。他方、農村地区では、第1位に好き嫌いの感情、次いで、統合認知の団結心、リーダーへの評価、参加意欲としての役割意識、感情の安堵感の順となっている。それら両地区に共通する、リーダーへの評価と参加意欲の役割意識、さらには、統合認知の団結心などについては、その多くが、

地域のスポーツクラブ参加に起因する、リーダーやメンバー、そして、グループへの参加意欲に直接的に関係するものとして、比較的強い関連を示したと考えられる。しかしながら、都市地区での日常的なスポーツ実施については、永住意志についての地域評価が第1位に規定力をもつなど、農村地区に比べ、地域に対する参加、感情、統合認知に関する意識よりも、その地区への定住性そのものが強い影響力をもっているかもしれない。

地域のスポーツ・クラブ参加において、近隣型のスポーツ・クラブに所属しているメンバーは、コミュニティ・モラルへ好影響を及ぼすとした中島¹⁶⁾等の研究結果とは、必ずしも一致していない。それは、標本の母集団の広がり本研究の対象標本より大きく、かつ、クラブ参加者間の比較研究であるため、本研究とは、基本的に分析基準が異なることで説明がつく。加えて、本分析で明らかになった、外的基準に対して主に規定力のあるコミュニティ・モラルの項目をみると、それは、地域のスポーツ・クラブ参加に関係があると思われる。

尚、両地区の各外的基準別カテゴリスコアの一覧表は、表7、8に示してある。

表7 数値化の結果 (都市) 外的基準:コミュニティ・モラル行事参加

アイテム	カテゴリー	スコア
1. 同一化	1) かなりそう感じる	.632
	2) まあそう感じる	-.108
	3) あまりそう感じない	-.183
	4) ほとんどそう感じない	.071
2. 安堵感	1) そのとおりだと思う	-.042
	2) まあそのとおりと思う	-.059
	3) あまりそうは思わない	-.443
	4) ほとんどそうは思わない	.474
3. 仲間意識	1) そう思う	-.126
	2) まあそう思う	-.224
	3) あまりそうは思わない	-.126
	4) ほとんどそうは思わない	-.494
4. 好き嫌い	1) 非常に好き	-.156
	2) やや好き	-.049
	3) やや嫌い	.301
	4) 非常に嫌い	-.384
5. 役割意識	1) そう思う	-.300
	2) ある程度思う	.258
	3) あまり思わない	-.130
	4) ほとんど思わない	-.642
6. 行事への関心	1) 非常に関心がある	1.273
	2) やや関心がある	.326
	3) あまり関心がない	-.654
	4) ほとんど関心がない	-1.008
7. 相互協力	1) 全くそのとおりだと思う	-.348
	2) まあそのとおりだと思う	-.146
	3) あまりそうでないと思う	.447
	4) ほとんどそうでないと思う	.006
8. 団結心	1) 非常に強い方だと思う	.281
	2) やや強い方だと思う	-.039
	3) やや弱い方だと思う	-.165
	4) 非常に弱い方だと思う	-.273
9. リーグ	1) 非常によくやっている	-.109
	2) まあよくやっている	-.030
	3) あまりやってない	-.018
	4) まったくやってない	-.287
10. 永住意志	1) ぜひいつまでも住んでいたい	-.110
	2) なるべく住んでいたい	-.119
	3) できれば移りたい	.193
	4) ぜひ早く移りたい	-.271
11. 総合	1) かなりよい	.039
	2) まあよい	-.072
	3) あまりよくない	-.728
	4) 悪い	-.455

外的基準:現在のスポーツ参加

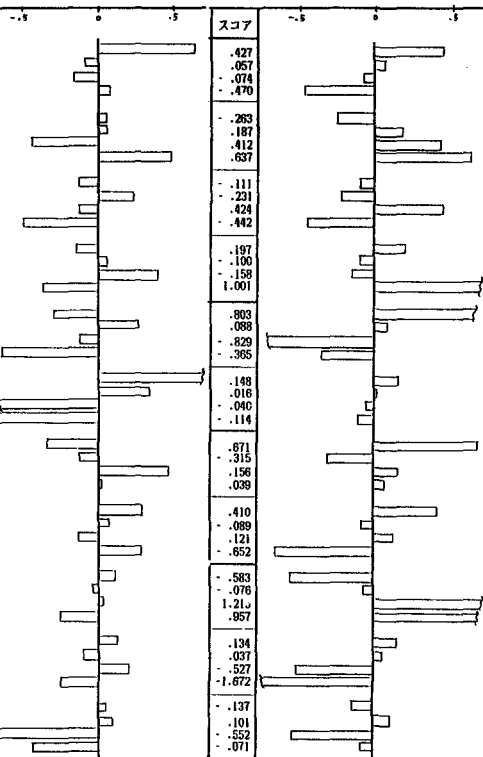


表 8 数値化の結果 (農村) 外的基準: コミュニティ・モラルへの影響

外的基準: 現在のスポーツ参加

アイテム	カテゴリー	スコア	外的基準: コミュニティ・モラルへの影響			外的基準: 現在のスポーツ参加		
			-1.5	0	.5	スコア	-1.5	0
1. 同一化	1) かなりそう感じる	.378				-.114		
	2) まあそう感じる	.109				.016		
	3) あまりそう感じない	-.261				-.010		
	4) ほとんどそう感じない	-.223				-.138		
2. 安堵感	1) そのとおりだと思う	-.063				-.431		
	2) まあそのとおりと思う	-.066				-.289		
	3) あまりそうは思わない	-.278				-.794		
	4) ほとんどそうは思わない	-.520				-.973		
3. 仲間意識	1) そう思う	-.004				-.469		
	2) まあそう思う	-.009				-.315		
	3) あまりそうは思わない	.041				.031		
	4) ほとんどそうは思わない	-.253				-.917		
4. 好き嫌い	1) 非常に好き	-.423				-.196		
	2) やや好き	.062				-.142		
	3) やや嫌い	.894				-.194		
	4) 非常に嫌い	.308				-2.353		
5. 役割意識	1) そう思う	-.013				-.602		
	2) ある程度思う	.007				-.353		
	3) あまり思わない	-.033				-.750		
	4) ほとんど思わない	.058				-.940		
6. 行事への関心	1) 非常に関心がある	1.009				-.391		
	2) やや関心がある	.529				-.063		
	3) あまり関心がない	-.578				-.200		
	4) ほとんど関心がない	-1.810				-.677		
7. 相互協力	1) 全くそのとおりだと思う	.386				-.632		
	2) ややそのとおりだと思う	-.066				-.327		
	3) あまりそうでないと思う	-.308				-.043		
	4) ほとんどそうでないと思う	.482				-.424		
8. 団結心	1) 非常に強い方だと思う	-.239				.698		
	2) やや強い方だと思う	-.014				-.013		
	3) やや弱い方だと思う	.691				-.185		
	4) 非常に弱い方だと思う	.628				-.962		
9. リーグ	1) 非常によくやっている	-.052				-.138		
	2) まあよくやっている	.031				-.013		
	3) まあよくない	.029				-.515		
	4) まったくやってない	-.546				-1.122		
10. 永住意志	1) ぜひいつまでも住んでいたい	.294				-.286		
	2) なるべく住んでいたい	-.059				.073		
	3) できれば住んでいたい	.529				.638		
	4) ぜひ早く移住したい	-.525				-.533		
11. 総合	1) かなりよい	-.019				.377		
	2) まあよい	.027				-.035		
	3) あまりよくない	-.189				-.434		
	4) 悪い	-.768				-.923		

5. 結語

二つのコミュニティ・スポーツ参加を外的基準に、コミュニティ・モラルへの影響についての分析結果について述べてきた。

本研究で対象とした、一小学校区程度を範疇とした、自治省モデル・コミュニティにおいては、コミュニティ内の住民相互の交流を密にするコミュニティ・スポーツ行事参加については、モラルとの関連は見られるものの、日常のかつ個人の自由な意志によって行なわれるスポーツ参加においては、あまり強い関連を示さなかった。

外的基準に対して、判別力を示したスポーツ行事参加のコミュニティ・モラルの質については、都市型コミュニティと農村型コミュニティにおいては、コミュニティそのものへの住民の意識や態度の質と量の違いが、そのまま、行事参加を促進する要因となっている。換言すれば、都市型では、感情、参加意欲、統合認知、評価の四側面から構成されるコミュニティ・モラルの中の、参加意欲の行事への関心を除き、その他は、地域の物的、人的な環境にからんだ抽象的表現としての意識や態度に、農村地区では、地域への愛着心から明確にされた意識や態度に強い関心を示している。このことは、明らかにコミュニティそのもののもつ地域特性や、そこでコミュニティ・モラルの独自の形成状況によって、スポーツ行事への参加が決定されることを意味している。

それでは、本研究の分析結果をもとに、本研究の仮説について検証してみよう。

- 1) コミュニティ・スポーツへの参加は、コミュニティ・モラルへ有効な影響を及ぼすことについては、コミュニティ内のスポーツ行事参加レベルにおいて妥当な結果がでたといえる。
- 2) スポーツ参加のコミュニティ・モラルへの影響について、都市・農村両地区間にあまり顕著な差は見られなかった。

本研究においては、コミュニティ形成の核を、コミュニティ・モラルの形成としてとらえ、それについてスポーツ参加との関連を明らかにしようとした。しかしながら、予想よりも顕著に、スポーツ参加がコミュニティ・モラルに影響を与えていなかった。これは、一小学校区という範疇をもった自治省モデル・コミュニティでは、スポーツ行事への参加は、有効な手段であるが、個人のスポーツ参加は、必ずしもそうとはいえないかもしれない。住みよいコミュニティづくりのために、スポーツが、どのように機能するのか、とりわけ、異なった地理的範疇をもったコミュニティでは、その意識や態度に及ぼす影響がどのように異なるのか等については、今後の研究課題としたい。

引用文献

- 1) 国民生活審議会調査部会コミュニティ問題小委員会：「コミュニティ——生活の場における人間性の回復」1969.
- 2) 経済企画庁：「経済社会基本計画——活力ある福祉社会のために」59-60, 1973.
- 3) 経済企画庁：「コミュニティ・スポーツ施設整備計画調査報告書」14-18, 1974.
- 4) 自治省行政局：「コミュニティ（近隣社会）に関する対策要綱」『ジュリスト増刊総合特集、全国まちづくり集覧』No. 9, 318. 1977.
- 5) MacIver, R.M. : *Community A Sociological Study*, Macmillian & Co., London, 1917. 中久郎・松本通晴監訳『コミュニティ』46, ミネルヴァ書房, 1975.
- 6) Hillery, G.A. : *Definitions of Community, Areas of Agreement*. *Rural Sociology*, Vol.20, 119, 1955.
- 7) 松原治郎：「コミュニティの社会学」25-28, 東京大学出版会, 1978.
- 8) MacIver, R.M., & C.H. Page: *Society, An Introductory Analysis*, 1949. 若林敬子・武内清訳：「コミュニティと地域社会感情」『現代のエスプリ』コミュニティNo. 68, 至文堂, 1973.
- 9) 鈴木広：「コミュニティ・モラルと社会移動の研究」アカデミア出版会, 1978.
- 10) 海老原修他：「コミュニティ・スポーツの社会的機能について——コミュニティ形式に果たす役割の検討」『レクリエーション研究』8, 41-50, 1980.
- 11) 中島豊雄・川西正志他：「地域社会におけるスポーツ・クラブの社会的機能——コミュニティ活動とコミュニティ意識を中心として」『名古屋大学総合保健体育科学』6-1, 143-155, 1983.
- 12) 守能信次他：「社会人の余暇に関する研究——要因分析を用いたスポーツ実施規定要因に関して」『体育学研究』15-5, 1971.
- 13) 三宅一郎他：「異なるレベルの選挙における投票行動の研究」創文社, 1967.
- 14) 永吉宏英他：「フィジカル・レクリエーション成立を促す要因分析——林の数量化理論第Ⅱ類を用いて——」『レクリエーション研究』6, 29-39. 1977.
- 15) 海老原修：前掲書10).
- 16) 中島豊雄：前掲書11).